同窓会だより

鈴木　朝英　先生揮毫

事務局　〒060-0811
札幌市北区北11条西7丁目
北海道大学教育学部気付
011-707-6586

発行責任者
会長　宮崎　隆志

北海道大学教育学部同窓会

時代に応答する同窓会



教育学部同窓会長
宮崎　隆志

今年の役員改選で、引き続き会長職に留まることになりました。皆さまの御協力なしに同窓会は成り立ちません。何卒よろしくお願い申し上げます。

さて、周知のように北海道大学は今年度に創立百五十周年を迎えます。数えてみれば、教育学部は七十七周年にあたります。ということは、創設四年後には教育学部同窓会が設立されていたはずですので、この同窓会も七十三年の長きにわたって存続していることになります。企業の平均寿命は三十年らしいので、それに比べれば類まれな組織と言えますが、卒業生の善意を七十年以上も蓄積してきたと考えると確かに感慨深いものがあります。

しかしながら、この三十―四十年間の時代の変化はすさまじく、同窓会といえども学部の窓から見える世界は大きく変わりました。また窓そのものも変化してきたため、かつてのように同じ窓から世界を見る仲間とは単純に言えない時代に入ったとも言えます。

学部創設の頃の卒業生は、いわゆる城戸構想のもとで学び、従来の教育学の枠を超えた教育の理論と実践に挑まれたと思われます。一九七〇年前後の「政治の季節」の中で学んだ学生たちの中には、教育科学の成就によって新しい社会を創造するというパッションをもって、社会運動を含む多様な分野で挑戦を続けた方も多くおられました。

翻って現代を見れば、入学者の動機も卒業後の進路も多様化しています。大学教育を支える研究でも専門分化が進展し、その結果、教育は依然として最大公約数でありながらも、領域を超えて総合化している人文・社会科学（医学や情報学もです）との接面で展開する研究が増えています。学部・学院の教育や研究は専門性を高めつつ多様化しているように思われます。

以下は私見ですが、教育・研究の多様化という現象の背後には、私たちが市場型社会への移行を余儀なくされたことがあるように思います。市場型社会はつかみどころがない概念ですが、教育・福祉領域に引き付ければ、家族が市場を前提にふるまうようになった社会と特徴づけられます。共働き世帯が基本型になるにつれて、日本では家族が担うケア機能（人間的再生産）は市場に依存するようになり、例えば「非認知能力を育む最新プログラムに従った子育て」のように、家族外のみならず家族内のケア機能まで市場の合理性に基づき整序されるに至りました。

私たちの日常となった市場型社会では教育は手段的な価値しか持たなくなり、研究や教育の世界でも、人間や社会の方向性を示す教育学よりも、個別的な課題をエビデンスに基づき解決できる理論が必要とされるようになりました。

抽象的な話題になってしまって恐縮ですが、要するに、学部は社会の要請に応答して変化してきたのであり、同窓生が共有する窓もそれに応じて変化してきました。社会的な課題や期待の視点から見れば、学部創設から七〇年代に至るまでは、「憲法＝教育基本法」の理念の具体化が基本課題であったのに対し、九〇年代以後は市場による調整機能をより円滑・高度に進める資質・能力の形成が社会的な要請となりました。人間の諸能力・人格を陶冶する場としての学部が、それぞれの時代に応答する精神性を育むようになることは、その是非は別として必然的です。

このような大雑把な理解が、仮に妥当性を持つとすれば、これからの同窓会の意義やありかたについても再考が必要かもしれません。世界を見る窓は世代間のみならず、同世代の間でも違っているとしたら、もはや同窓という名称は相応しくないとさえ言えるのかもしれません。しかし、だからといって、同窓会を廃止するということにはなりません。

学部・学院の側では、その単位が存続する限りは、多様で個性的な窓のそれぞれから見える世界を有機的に関連づけることが必ず課題として生成します。そして、市場型社会への応答の総体を見れば、やはり人間と社会の方向性を示す固有の学問としての教育学、つまり市場型社会を超える教育の論理が浮かび上がるはずです。そのためには、学部・学院の内部のみならず、その外部に広がった私たち「アルムナイ」の経験を束ねる機能が必要です。その時には、卒業・修了生の皆さんのそれぞれの人生は、そのすべてが学部・学院が備えるべき陶冶機能と彫琢すべき教育概念を省察する鏡になるはずです。

市場型社会の日常生活者となった私たちの側からみても、市場に翻弄されているうちに、波間に漂う根なし草になりかねないとすれば、多様な窓からそれぞれなりに誠実に世界を眺めて生成した人生物語を持ち寄り学ぶことで、私たちの根である人間に対する信頼を取り戻すことができるかもしれません。その場も「アルムナイ」のファカルティです。

このような夢想をしながらも、会務は新事務局の皆さんのご協力により、地に足をつけて進めてまいります。重ねて何卒よろしくお願い申し上げます。

会員の活動

同窓会「恵庭支部」発足報告

藤野　真一郎
（一九九六年卒、社会教育ゼミ）

北大教育学部を卒業された皆様、如何お過ごしでしょうか。平成七年度卒業の藤野と申します。

さて、このたびの同窓会だよりに北大教育学部同窓会「恵庭支部」が発足したことをご報告させていただきます。

私の勤務先は恵庭市役所でして、まずは恵庭市の紹介をさせていただきますが、恵庭市は人口七万人ほどのまちで、人口減少が続く北海道の中では、数少ない人口増のまちです。また、札幌市まで快速で約二十四分、新千歳空港まで約十三分という恵まれた交通ネットワークを持つ道央圏の中核都市でありながら、豊かな自然にも囲まれる、充実した都市機能と自然が融合したまちです。


▲記念すべき北大教育学部同窓会「恵庭支部」発足の会。左から2人目が筆者

また、恵庭市役所の同僚には教育学部卒業の後輩が四人ほどおり、そのメンバーでちょこちょこと懇親を深めたりしています。

そんな折、私の指導教官でもあり、元学部長の宮崎隆志先生が令和五年度に北海道文教大学に着任され、早速囲む席を設ける中で、同窓会「恵庭支部」の立ち上げの話になりました。同大学の吉岡亜希子先生、そして令和八年度から学長に就任された玉井康之先生を加えて、機は熟したということで本年四月十五日に恵庭市の飲み屋街栄恵町の居酒屋「小ばちゃん」にて恵庭支部が発足しました。

では、恵庭市役所に勤める支部メンバーを①氏名②卒業年度③専攻ゼミ・学生時代の様子④近況ということで紹介します。では、私から……

①藤野真一②平成七年度③社会教育・勉強（バスケ!?）が好きで四年生を二回ほど④担当は学校教育ですが、社会教育主事発令されています。北大バスケ部OB会の事務局として現役部員の試合観戦に明け暮れる日々。

①中山真②平成一四年度③体力科学・サークル会館横のAグラウンドとすすきのを往復する毎日④泣く子も黙る企画課長。随分更生しました。また、息子が去年花園に出場しました。

①根深忠大②平成二一年度③社会教育・仲間たちと夜な夜な討議、雑談、飲食の日々④読書推進課で図書館の改修と学校図書館を担当しています。妻・まなみも教育学部（社会教育）卒です。小学校二年生の息子と二歳の娘共々地域に支えられ、すこぶる元気に過ごしています。

①津田紗希子②平成二三年度③教育行政・尊敬する横井先生と先輩たちのもとでのびのびと楽しい学生生活を過ごしていました④四年前に念願の教育委員会に配属。社会教育課にて、アクティブな市民の皆さんに付いていくため日々勉強中！

①藤原千佳②平成二四年度③教育行政・社会教育分野にも少しお邪魔しながら、勤勉ではないけど真面目？なキャンパスライフ④介護福祉課にて高齢者相談と介護認定を担当。初めての業務ばかりで悪戦苦闘中……

今後の恵庭支部の活動ですが、北大教育学部同窓会の宮崎会長をはじめ、北大教育学部に縁のある北海道文教大学の玉井学長、吉岡先生とも定期的にのどをうるおしていきたいと考えております♪　もちろん恵庭支部メンバーの掘り起こしも。

知らせすることとします。今回は、私個人の思いを記すことをご容赦願います。

私は、教育学部を卒業後、本別高校、札幌東高校の教諭、道教委（本庁、オホーツク・胆振・日高教育局）の指導行政、函館稜北高校の校長、北海道教育大学教職大学院・教育学部の特任教授（実務家教員）を経て、今年四月から札幌大学教授として教職希望者の指導を担当しています。

大学での研究・教育に携わることになった時、学士の私にとっては、研究分野は未経験でしたので、六十一歳にして学会に加入（教育方法学会、教育社会学会、カリキュラム学会、教育経営学会、教育心理学会、教師教育学会、教育学会、教育行政学会、北海道教育学会）して勉強してきました。

その経験から感じたことは、教育学研究と、教育行政、学校現場がバラバラで、優れた研究があるのに、現場と乖離があり、もったいないという思いでした。北大教育学部・院で深めてきた専門性を持つ、同窓生の皆さんと、学校現場をベースに、いろいろと情報交換

学校教育支部（仮称）設立に向けて



赤間　幸人
（一九八四年卒、
技術・職業教育ゼミ）

宮崎同窓会長からの支部設立の提案を受けて検討している最中の状況をお伝えします。支部は、地域に限らず職能など、様々な分野の集まりで構わないとの趣旨から、私が長く携わってきた学校教育の関係者（主に教員）に声をかけて、情報交換の機会ができればと思い立ち、仮称ですが「学校教育支部」を立ち上げることにしました。現在、十五名程の同窓生の皆さん（高校・中学校の校長・教頭・教諭、教育行政担当者等）に賛同していただいています。

支部発足は今年八月に予定していますが、この原稿の締切は発足前なので、第一回の集まりの様子は、機会がありましたら改めてお

ができたらいいと考えて、支部を設立することとしました。第一回の集まりを楽しみにしているところです。

記憶の継承の片隅で



塩田　哲也
（一九九〇年卒、教育計画ゼミ）

同窓会会員のみなさん、こんにちは。平成二年卒の塩田です。この度、幹事会から寄稿の要請をいただきました。長年にわたり同窓会活動へ何の貢献もしてこなかったため躊躇いたしましたが、同窓会に対する現在の率直な思いを綴らせていただきます。

平成二年に卒業と共に上京したものの、その後に地場企業へ転職し、札幌に住んでいた時期がありました。その際、私は同窓会の幹事会に参加していました。学生時代、学問への向き合い方が不真面目だった自分への罪滅ぼしと学部への恩返しと、そして地場企業に身を置く者として仕事に繋がればという気持ちもありました。初めて参加した幹事会で、大先輩方から「平成卒が来てくれた」と大歓迎を受けた日のことは今でもよく覚えています。皆さんの同窓会への強い思いに触れるうちに、自利よりも利他の気持ちで参加することが大切で、それによってお互いの信頼関係が生まれ、結果的に自分へと還ってくるものだということを学びました。

その後、東京の企業への転職を機に、同窓会からは足が遠のき、何もしていなかったので、先日幹事の退任を申し出たのですが、その際、宮﨑会長から次のようなメッセージをいただきました。「同窓会が消滅すれば『教育学部の記憶』が継承されにくくなってしまいます。記録は制度的に蓄積されても、そこに集い活動した人々の生きた記憶は個々人の中でやがて風化していくものです。同窓会は、教育学部に集まった人々の記憶を重ね合わせ、穏やかに共鳴させることで、生きた記憶を継承する装置であると考えています」この言葉をいただき、こんな私でも、学部に在籍した記憶の一部になり得るのであればと、そのまま籍を置かせていただくことにしました。

現在、私は東京のゲーム制作会社で働いており、今のところ北海道へ戻る予定はありませんが、微力ながらこの「記憶と記録の更新」に貢献できればと考え、この寄稿文を綴らせていただきました。北海道や関東で同窓の皆さんと顔を合わせる機会があるとよいなと思っております。（株式会社ＩＭＡＧＩＣＡＧＥＥ　Ｑ　取締役常務執行役員）

福地保馬先生と体育部屋飲み会

阿部　由果子
（一九九八年卒、健康教育ゼミ）

昨年二〇二五年十一月十五日に、卒業後二十七年ぶりの同窓会という名の飲み会を開催しました。教育学部体育系ゼミ室（通称「体育部屋」）の先輩方や同期そして須田力名誉教授の合計十八名が札幌のカネサビル（北十七条西四丁目）に集まりました。

久しぶりの再会のため、「お互い誰なのか分からなかったら、どうしよう」と飲み会の直前まで不安に思っていましたが（名札も用意しましたが）、全くの杞憂でした。須田先生も先輩方も同期も昔と変わらず、まるでタイムスリップしたかのようでした（笑）。

昔と変わらない自由でおおらかな空気のなか、飲み会はとても盛り上がり、解散時刻は翌朝の午前四時頃だったと思います。（**写真**は、飲み会の集合写真です。）

須田先生、ご足労くださり、また、ご近況報告と手作りの教材を人数分ご用意くださり、ありがとうございました。

そして、参加してくださった先輩方、半年以上も前から準備や相談にのってくれた同期四名、ありがとうございました。

仕事や予定をやりくりして駆けつけてくださった方や北海道外から参加してくださった方も多数いらっしゃいました。心から感謝しております。

この度の体育部屋飲み会を開催するきっかけとなったのは、昨年二月九日に恩師の福地保馬名誉教授がお亡くなりになったことです。

福地先生の告別式に参列するために札幌に行った際に、北大の中央食堂で同期の牧原香苗さん、穂苅陽子さんとランチを食べながら、「久しぶりに皆で会いたいね。同窓会する？」という会話をしたことがきっかけでした。

福地先生といえば、同期と今でも「ありがたかったよね」と話す思い出があります。それは、福地先生ご自宅一泊ツアーです。福地先生のご自宅に学生が十数人も（健康教育ゼミ生以外の体育系ゼミ生を含む）お邪魔して皆で語り合いながら、奥様の道子さんの手作りの美味しいご飯やケーキを食べきれない程ご馳走になり、美味しいお酒をたくさん飲ませていただき、ご自宅に泊まらせていただき、翌朝また道子さんの手作りの美味しい朝食をいただき……というものでした。

十分大人になった今は、このツアーがどれほど福地先生と道子さんに色々とご負担いただいたありがたいものだったのか思い及びますが、当時、世間知らずでぼんやりとした学生だった私は、ことのありがたさに気が付かず、福地先生と道子さんにきちんと御礼を申せていませんでした。

そのようなことがあり、福地先生と道子さんに、約二十七年前のご自宅一泊ツ



アーのお礼を申し上げたく昨年の福地先生の告別式に伺いました。

福地先生の告別式で、道子さんは、「あの時は、私もそれが楽しかったからね」とおっしゃってくださいました。また、「あの時の忘れ物のスリッパを保管しているのだけれど、あなたの？」ともおっしゃっていました（笑）。これには後日談がありまして、スリッパの持ち主である先輩がこの話を聞いて、道子さんを訪問したそうです。

このように、福地先生は講義以外でも学生を気にかけてくださる懐が深い先生でいらっしゃいました。

懐かしい顔が集まれたのは、福地先生が繋いでくださったご縁のおかげだと思っております。福地先生、本当にありがとうございました。これからもガハガハ笑いながら北大教育学部を見守ってくださったらと思います。

最後に少し自己紹介をさせていただきます。

私は一九九八年に教育学部を卒業しましたが、卒業後に税理士資格を取得し、現在、大阪市で税理士業務を行っております。せっかく教育学部を卒業したのに、何故税理士に？と自分でも思います……福地先生からいただいた教えを活かせていないことが申し訳なく、もう一度大好きな北大に入学してやり直したい（もう一度北大ライフをエンジョイしたい）と最近思っています（笑）。

このように北大好き、札幌好きな私ですので、また定期的にこの体育部屋飲み会を開催して、皆で年齢を重ねていきたいな……と画策中です☆

会員の投稿

南鷹次郎のサインボール

北海道江別市
佐々木　孝一
（一九七四年卒）



夏空に白球を追う少年たちの歓声が北大の地に轟いた。一九三一（昭和六）年八月二日第八回全道樺太少年野球大会が北大運動場で開かれたからである。

この大会は一〇〇年前、一九二四（大正十三年）に始まる。北海タイムス社が主催し、中島公園の一角で行われた。当初は予選参加校の数も少なかったが、身近な子どもたちの大会とあって、次第に地域が熱を帯びる。

中等学校の生徒たちの硬式野球大会は、甲子園に会場を移して全国規模夏の行事であった。けれど硬式は用具等の費用が莫大である。加えて中等学校は数が少なく進学者も限られていた。

少年野球大会は地域の小学校の高等科（現在の中学校二年生）までが対象だ。ついこの間まで徒党を組んでいた悪童どもが主役とあって、地区予選から熱気を孕む。一九二八（昭和三）年からは市部とは別枠で支庁管内で予選が行われ、樺太からの二校を含めて二六校が出場権を得た。北海タイムス社にとっても部数の伸びに直結する。勢い力のこもったものになる。

迎えた第八回大会は、中島公園から北大工学部北側に広がる北大運動場に会場を移す。架設の観客席を設置し本部席やスコアボードなど設備を整えた。事実開会式の写真には入場する選手の向こう側の内野スタンドと工学部校舎が見える。

大会の緒戦は札幌第一高小（高等小学校単置校～一部の都市部にあった）と旭川日章小の対戦である。試合の開始に先立って始球式が行われる。南鷹次郎総長が始球式の一投を投じる。式の後ボールにサインした記録が残されているが、ボールがどこにいったか、報道は詳細を伝えていない。

この試合、札幌が三対〇で旭川を降す。旭川日章の投手はヴィクトル・スタルヒンであった。彼は尋常科六年生ながら主戦で長身から投げ下ろす直球と外角のアウトドロップ（落ちるカーブ）で札幌第一の打者をきりきり舞いさせた。

八月七日までつづいた熱戦は、大会後北海タイムス社が出した写真集（グラフ）が今に伝える。フェンスに企業の広告が刻まれ、紅白の柱に日よけがかかる内野スタンドなど本格的な装いも見える。遠くに北大の校舎やポプラの木々が写りこんでいる。正門から遠く離れた寄宿舎の近くではあったが、歓声に誘われて北大関係者も無関心ではいられない。工学部職員が作った仮設の専用スタンドの一コマが見える。

最終日、準決勝と決勝が行われ、ＩＫが実況放送で伝える。伊達紋別小と帯広柏陵小の決勝は伊達が二対一のサヨナラで勝利する。帯広柏陵はわずかのところで連覇を逸する。

各チームの選手名鑑と記録を兼ねたこのグラフは、北タイの業績を大きく伸ばしたことだろう。望遠レンズなどの機材の乏しかったころ、写真班が二塁手の後方に位置してカメラを構えている。力の入れようと時代が見えてくる。

決勝で敗れた帯広柏陵ばかりでない。この大会を目指していたすべての学校と地域は次の大会をと意気込んだことだろう。「次こそはきっと！」と。けれど次の大会はやってこなかった。

翌年四月、文部省が小学生の野球大会の対外試合を禁止したからだ。全国的に盛り上がりすぎて、一部の選手がスター扱いされたり、合宿や遠征で教育上の弊害が出たからだという。大会直後の九月一八日に始まった満州での戦火が影響したのかもしれない。

北大教育学部同窓会のメールアドレス

同窓会のメールアドレスを作りました。会員のみなさまには、今後このアドレスからメールが送られることがあります。よろしくお願いします。

北大教育学部同窓会　edu.hokudai.dosokai@gmail.com

お元気ですか

「お元気ですか」は同窓生に大学時代からの歩みと現在を語ってもらうコーナーです。第二回は、総務省を中心に公務員として活躍する高橋英一さんです。

人間と組織を見つめた二五年間

高橋　英一
（二〇〇一年卒、教育行政学ゼミ）
総務省大臣官房秘書課
課長補佐

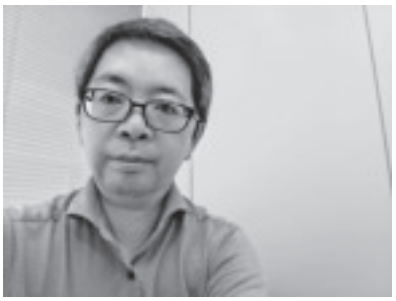
農林水産省に採用された後輩の投稿（二〇二四年・第四十二号）に刺激され、総務省を中心とする四半世紀に渡る公務員人生を振り返ってみることにしました。

私は、二〇〇一年に教育学部（教育行政学ゼミ）を卒業後、まず、総務省の地方支分部局として札幌に所在する北海道管区行政評価局（私より上の世代で公務員を経験した方々には、旧行政管理庁・旧総務庁時代の北海道管区行政監察局（＝通称「行監」）の方に馴染みがあるかもしれません。）に採用されました。卒業後に公務員を目指す場合、地方公務員を選択する方が多い中で、あえて国家公務員を選んだのは、父親も国家公務員で、高校卒業までの間、その転勤に同行し、全国の都市部から過疎地域まで様々な街での暮らしを経験した強みを活かせるのではないかと漠然と考えたことにあります。

また、幅広い問題関心を有していたことから、文部科学省や厚生労働省など教育学部での学びに関わりが深い府省ではなく、広く様々な行政課題に関与することができる総務省を選択した次第です。

そのような形で始まった公務員人生ですが、採用三年目の二〇〇三年に本省に異動したことが大きな転機となります。元々は、現場で自分が担当した仕事が、本省でどのような過程を経て最終的な成果につながっているのか自分の目で見てみたいという素朴な想いから本省への異動を希望したものの、様々な業務を経験し、省内外の多様な先輩・同僚・後輩は言うまでもなく、時には国・地方の政治家、大学の研究者を始めとする有識者など様々な方々との出会いから多くのことを学びました。

いわゆる事務系の公務員として活躍するのに直結する知見という意味で、法学部や経済学部での学びに一日の長があるのは言うまでもありません。しかしながら、リスキリングという言葉が流行る以前から教育学部での学びの中で、生涯学習という考え方を学んでいた身として、また、自らの問題意識に基づく自主的・自律的な学びを求められる自由な風土での経験を踏まえて、業務に必要となる知見は、自らの積極的な投資を通じて獲得するというのは当然で、初めて携わる業務に触れる度に新たな知見を深めるとともに、過去の業務などとのつながりを発見し、自らの成長につなげることができたと自負しています。その結果、省・局の窓口としての全体の調整、地方自治体からの要望を踏まえた制度改正、コロナ禍への対応からデジタル庁設置への参画等々様々な場面で、自分なりの役割を果たせたものと考えています。



▲特段の制約がない場合は、このようなラフな格好で勤務しています

そして、係員から始まり、係長、課長補佐と役職段階を踏んでいく中で、若かりし頃は理不尽な上司の振る舞いに悔しい想いをすることも度々でしたが、様々な経験を積むことで、自らが自信を持って判断、指示できる範囲が広がり、かつて人気を博した某テレビドラマのセリフである「正しいことをしたければ偉くなれ」という言葉も実感しました。

この二五年間で公務員の働き方、さらには行政の在り方は、社会全体の変化に置いていかれそうになりながらも変化してきました。具体的には、働き方改革、ＤＸ（Digital Transformation）、EBPM（Evidence Based Policy Making）、さらにはＡＩの利活用といった変化の波が押し寄せ、様々な業務の見直しにつながっています。しかしながら、それらの手法さえ活用すれば、全てが解決するわけではありません。それらはあくまでも業務をより進めやすくするための手段にしか過ぎず、活用して何を解決したいのかという目的を忘れてはなりません。

結局、公務員というのは、突き詰めれば、社会生活を営む上で、課題となっていることを解決して前に進めていくことが役割であり、そのためには、何が課題で、どのようにすれば解決できるのかというのを人間と人間、さらには人間が集まることで構成される組織と組織の間で丁寧に聞き取って、探っていくことが求められます。そして、そのために、様々な角度から人間に着目した学びを深めた北大教育学部での経験が少なからずプラスになっているのではないかと考えます。

行政に対しては、いつの時代も数多の批判があり、もちろん、反省すべきところは反省して見直していく必要はありますが、デジタルのメリットを発揮できる様々な手法を上手に活用しながらも、最後は個人の間で真摯に向き合い、個人だけでは解決できないことは、組織の力もプラスに変えて結論に近付けるというプロセスを何度も経ながら、少しずつ前に進んでいくしかないと思っています。

そして、私自身様々な辛いことがありながらも、四半世紀に渡って、この職業を続けてこられたのは、出会った一人一人の人間、さらには、その人間によって構成された組織の振る舞いに飽くなき興味・関心を持ち続けられたことにあり、その原点は、手に取った「We Like Humans」というキャッチコピーを題した受験生向け案内誌に興味を惹かれて、四年間を過ごした北大教育学部にあるのではないかと改めて思う今日この頃です。

会員短信（二〇二五年九月～二〇二六年六月）

会員各位から送られた近況を掲載します。到着順になっています。

「氏名」「卒業年次」「現住の都市名等」と記入のコメントの順です。

文字、数字、送り仮名、改行など原則原文のとおりとしました。

＃印は振込用紙に記載されたものです。

「掲載不要」との添え書きのあった分については掲載していません。

卒業年次等細心の注意をしておりますが、誤りのあった場合はご容赦ください。

今年は総会がありませんので、総会の出欠はがきは同封しておりません。代わりに近況をお知らせいただくはがきを同封しましたので、そちらをお使いください。

また、グーグルフォームからも近況を書き込むことができます（QRコードもご用意しました）。詳しくは最終面（16ページ）をご覧ください。

・佐々木　紀子（二〇〇四年卒）札幌市北区

みなさんお元気でしょうか？何よりも健康が大切だと思う日々です。50才をすぎましたが、まだまだ語学や資格、新しいことを学んでいくのが楽しいです。今は独学ですが、またみなと学べたらいいなと思っています。

・三村　道丸（一九七八年卒）北海道共和町

昭和を生きていた十代の私に今の生活を説明したらどのくらい話が通じるだろうかと時々考える。あの頃の私には想像すらしていなかった未来をいきているのだから

・佐々木　成行（一九六九年卒）北海道余市町

「同窓会だより」が届くたびに、知っている人の名前をさがしている自分に気がつきます。

・福田　三行（一九六九年卒）北海道江別市

いつも歯切れのよい「同窓会だより」を拝見しております。ありがとうございます。

・松永　武（一九六七年卒）札幌市白石区

いつもありがとうございます。

松永武（夫）は、昨年四月逝去いたしました。

・杉山　昌夫（一九八三年卒）札幌市西区

札幌移住、一年半。雪祭、よさこい、北大祭、ビアガーデン、神宮祭、そしてコンサドーレ応援、楽しく過ごしています。

・国吉　昌晴（一九六六年卒）東京都西東京市

常勤を降りて久しいですが、団体顧問の立場で中小企業同友会の活動に参加しています。健康保持に留意しつつマイペースの日々です。

・清水　康博（一九八五年卒）北海道富良野市

中川先生には大変お世話になりました。

もう一度お会いしたかったと悔いています。

・小野塚　恒男（一九七八年卒）新潟市中央区

「だより」をお送りいただきまして、誠にありがとうございます。新設の「ゼミ紹介」も読み応えがありました。「北大キャンパスは理想郷」の思いを、年々、強くしています。

・小林　勇樹（二〇〇七年修士課程修了）長野県中野市

元気でやっております。

・多米　豊（一九五四年卒）札幌市西区

94才になりました。教育学部を卒業した事を本当によかったと思っています。小児科医としても。

・小松　均（一九八四年卒）

コープさっぽろで役員として頑張っております。社会教育ゼミで2年上1982年卒の大見英明さんが理事長です。

・益村　欣照（一九六二年卒）

若いみなさんのご活躍を祈念しております。三味線を持って積丹あたりへ行きたかった。85才じゃちょっと無理かな。

・坂本　ひろみ（一九九一年卒）北海道苫小牧市

73才を過ぎても、未だ現役で教育に携わっていられることに日々感謝して生きております。人の成長を見るのは嬉しいことです。

・橋爪　幸正（一九六一年卒）さいたま市北区

午前中と夕方の2回、近所を散歩しています。今の

投稿、「お元気ですか」登場者募集

「同窓会だより」に会員各位の原稿を募集します。

テーマは「在学中の思い出」「母校と現在の絆」「思うこと／考えたこと」など。ゼミの同窓会、同期会、地域での学部同窓会の報告も歓迎です。

また「お元気ですか」にご登場いただける同窓生も募集しています。仕事、社会活動、子育て、介護、闘病生活、ボランティア、趣味などどのような話でもかまいません。自薦、他薦を問いません。

いずれの場合も二〇〇〇字以内にまとめてください。短くてもかまいません。「お元気ですか」は聞き書きも可能ですので、まずはご連絡ください。

「投稿」「お元気ですか」はいずれも次号以降に掲載しますが、紙幅の関係で繰り延べとなる場合があります。あらかじめご了承ください。

原稿、写真は事務局に郵送（住所は一面の題字右に掲載）、または同窓会のメールアドレス　edu.hokudaidosokai@gmail.com　にメールでお送りください。

ところ何とか健康で過ごしています。

・大居　健二（一九五七年卒）札幌市厚別区

テレビ視聴、読書、散歩が私の日常です。毎日、毎週、毎月変わりません。92歳になりました。人生百年時代、もう少しがんばります。

・塩田　哲也（一九九〇年卒）横浜市青葉区

現在東京のゲーム制作会社に勤務しております。

還暦が近づいてきましたが、まだまだ行けるところまで働こうと思います。必要とされる役割があれば。

・濱田　一康（一九七七年卒）札幌市南区

まだ現役で働いております。



・渡部　秀清（一九七二年卒）東京都杉並区

「日の丸、君が代」の強制、教基法の改悪を経てトップダウンの「国家主義教育」へ。その行く着く先が、不登校、精神疾患教員の増加と教員不足で公教育の崩壊状況です。

・佐藤　修二（一九七九年卒）札幌市北区

同窓会だよりが届くたびに懐かしい青春の日々を思い出します。薫陶を受けた恩師も皆、旅立たれましたが、その教えを胸に、次の世代に伝えていく努力を続けています。今もふと「恩師ならこの場面で何と仰るだろう」と思いを巡らせています。

・小島　忍（一九五六年卒）北海道江別市

2025年1月6日～5月28日まで、江別渓和会病院に入院しました。心不全、脳膜炎等、病も6種類あり、いよいよ大締めが近づいたかと、一日を大切にしています。総会は皆勤していますが、今回は無理です。悪しからず。

・愛甲　知佐子（一九九二年卒）札幌市中央区

今年も意義深く同窓会だよりを読まさせていただきました。不思議なもので、年を重ねると「同窓」という文言に共感を持つようになりました。

・鈴木　尚（一九五六年卒）京都市左京区

会員鈴木尚は本年2月21日に肺炎のため死去いたしました。93歳。

永年、お世話下さいまして有難うございます。

・鈴木　明子（一九五六年卒）京都市左京区

会員鈴木明子は本年7月24日に胃がんのため死去いたしました。93歳。

永年、お世話頂きありがとうございました。

・高橋（山谷）　尚子（二〇〇八年卒）東京都小金井市

通信便はこちらにお送りください。（転居連絡）

・葛西　明（二〇〇四年修士修了）北海道岩見沢市

いつもお世話になっております。同窓会員でありました葛西明は令和5年5月に亡くなりましたので、この書面をもって退会いたしたくお願い申しあげます。

長い間お世話になりありがとうございました。（長男）

・尾谷　正孝（一九六八年修士修了）札幌市豊平区

尾谷正孝は2014年に死亡しました。（妻）

・瀧澤　真毅（一九九〇年学部卒／一九九四年修士修了）北海道帯広市

転居連絡

・徳勢　正昭（一九六五年卒）横浜市港南区

2025年9月の朝日新聞に（歴史のダイヤグラム）「内村鑑三と札幌」原武史

1877（明治10年）8月27日、品川沖を出発した汽船「玄武丸」の船内に満16歳の内村鑑三の姿があった。玄武丸は途中函館経由で小樽に。馬に乗って札幌へ。・・・内村が札幌に向かったのは札幌農学校に入学するためだった。クラーク博士に感化され、キリスト教の洗礼を受けたのは翌年6月のことだ。・・・後に、内村鑑三は、「私が札幌に牽（ひ）かるゝ理由は単に其友人と天然とに因るのではありません。私は札幌において、神を発見し、キリストに捕へられたのであります。聖書を授かったのであります。かくて札幌は私に取り聖地であります。（「札幌の任務」）

私の場合は内村氏ほどの、「札幌の印象・聖地」では、ないけれども、1961年春は、一生を決める、記憶に残る年となった。多くの知己を得、札幌を去ったのちも、時において集い、様々話し合い、寮歌を歌った。そうした年月も60数年も昔のこととなった・・・・。

・渡会　雅明（一九八九年卒）北海道函館市

今年は18年ぶりに北海道マラソンを走る機会に恵まれました。TV観戦した東京オリンピックの舞台を実際に五感で味わい、クライマックスの北大構内を駆け抜けた時には、全く別空間に入りこんだような感覚に陶酔しました。これほどランナーたちの心を癒すラストコースは他にないでしょう。



・吉田　一男（一九六二年卒）神奈川県藤沢市

二〇二四年二月亡くなりました。

お世話になりました。（娘）

・川合　蘭（二〇二五年卒）札幌市豊平区

住所変更いたしました。

・逸見　勝亮（一九六六年卒／一九六九年修士修了）

札幌市中央区

昨年八月以降に会った諸兄姉。

柿谷啓子、永田知子、渡辺成江、玉川剛、小川正人、佐々木孝一、所伸一、白取道博、竹下忠彦、田中稔久、増渕俊文、村尾博司、太田成司、井上高聴、近藤健一郎、浜田慎二、須田力、今田裕一、浅川和幸、山本美穂子、渥美智美。

島尾朝児氏が死去。



・中谷　洋暁（二〇一七年卒）滋賀県近江八幡市

住居移転しました。

住所登録の変更をお願いします。

・菊池　卓哉（一九七五年卒）札幌市西区

住所変更しました。

・小松　秀樹（一九七九年卒）川崎市宮前区

毎年のように夏が暑くなってきました。扇風機すらなくても過ごせた学生時代が夢のようです。逸見先生のご健康を遠い地から祈念します。

・向井　一弘（一九九九年卒）東京都文京区

3年間勤めた函館から、東京勤務になりました。専門はスポーツ実況から情報番組リポーターに変わり、「あさイチ」「ニュースイン」の2番組が主戦場です。ご都合が合いましたら是非ご覧下さい。

・菅　洋一（二〇〇六年卒）札幌市北区

仕事でもプライベートでも子供と関わる時間だらけになっています。

・和田　昇（一九八三年卒）札幌市豊平区

66歳で任期満了、本年4月より年金生活を始めた矢先、6月から北大先輩の会社経営を手伝うことになり、またフルタイムで働いています。しばらく札幌に残ります。皆様との交流を楽しみにしております。（メール）

・後藤　隆之（一九七五年卒）札幌市東区

65歳で設立した株式会社の代表取締役を10月をもって退任予定です。

山あり谷ありの毎日でしたが、とても充実した10年間でした。

たくさんのお取引先に恵まれ、順調に売上高を伸ばしてきましたが、アナログ世代の一員ですので、さすがに潮時ですね。デジタル頭脳の若手世代に活躍の場を譲ります。

今後は体と頭脳が働けるうちは、資格や経験を活して、「プロボノ」的な人生を送りたいと思っています。「生涯現役！」という言葉が大好きです。（メール）

・高橋　英一（二〇〇一年卒）埼玉県和光市

20年振りとなる2年間の札幌勤務を終えて、霞が関に戻りました。

2年間の間には公私共に様々な形で北大にお世話になり、同窓生である強みを実感しました。（メール）



・赤間　幸人（一九八四年卒）札幌市東区

北海道教育委員会を退職して、北海道教育大学に勤めて5年目になります。教員志望者が減少してきていますが、教員を志望する学生は熱い思いで、子どもたちのために一生懸命指導力を身につけようと頑張っています。そんな学生の支えになれるよう、自分自身も60歳を過ぎてから、初めて学会に所属して学び続ける毎日です。（メール）

・町井　輝久（一九六六年卒）札幌市西区

会報にてなつかしい方々の訃報を拝見し、学生、職員として、北大時代を過ごしたことを思い起こしています。役員の方々、いろいろありがとうございます。

・高山　幸一（一九七四年卒）札幌市西区

会費と若干の寄付だけです。

会報楽しみです。

・林　孝幸（一九九一年卒）札幌市北区

いつも「同窓会だより」をお届けくださり、ありがとうございます。新コーナーの「お元気ですか」、「ゼミ紹介」も楽しみですね。

・浅田　初美（一九七九年卒）大阪府東大阪市

あちこち痛いところがふえて

年齢を感じる毎日です。

・田中　稔久（一九八三年卒）神戸市灘区

定年退職後5年を経過、子どもたちもようやく学校を出てそれぞれの道に。自分の学生時代と比べ2人ともよく研究、勉強してとてもかなわないと思いました。学部の同窓会のことに触れるにつけ、「会」を組織しなくても続く、学寮の友人とのつながりの強靭さは何故かと考えてしまいます。

・瀬川　孝広（一九九二年卒）福岡県苅田町

福岡で8年目になります。定年までカウントダウンの歳になりましたが、もう一度「大志」をもって、社会に恩返しせねばと思う日々です。

・赤羽　仁（一九六四年卒）長野県伊那市

今年六月に伊那文化会館で

ヘンデル「メサイア」をうたいました

北大合唱団以来今日迄合唱を続けています

・岩間　隆（一九七四年卒）さいたま市北区

七十五才になりました。

アルバムを整理していたところ教育学部にいたときの学生証がでてきました。と

ても若々しく、なつかしいものでした。

・齋藤　秀子（一九五五年卒）札幌市中央区

四年間の学舎であった今は存在の無い「北大中央講堂」をいつも懐かしく思い返しています。教職退任後から合唱団（札退教コーラス「睦」）の伴奏を続行中です。常に現状維持を心がけながら、なんとか元気に長生きしています。

＊同期の佐々木伸浩氏、令和五年八月二十三日逝去、お知らせ致します。

（佐々木氏についてはご家族からお知らせがあり、前号に訃報をお伝えしました）



・阿部　剛康（一九九一年卒）北海道釧路市

通信制に勤めてもう10年になりますが、最近女子生徒の割合が高くなってきました。

男子はどこへ行ったのでしょうかね。

・市澤　豊（二〇〇四年博修了）札幌市南区

大学で、「教育は国家百年の大計」と学びましたが、昨今の学校教育社会の様態は慚愧に耐えません

微力ながら60年余特別支援教育の実践と研究に関わった一人として、日本特殊教育学会において「この子一人の確かな学びと育ちを支援する学育とは」を主題に２０２０年から２０２５年まで提言しました。

参加者は院生が多く楽しかった。

・宮本　圭輔（一九七六年卒）青森県弘前市

二〇二四年六月他界致しました。

生前中はお世話になりありがとうございました。

・橘内　哲也（一九五五年卒）札幌市厚別区

93才、少しでも〝海馬〟の活性化に連なればと思い、唱歌を含め、歌詞の暗記、暗譜に努め、折々に唄っています。寮歌〝都ぞ弥生〟〝津軽の滄海〟〝瓔珞みがく〟やストームの歌も口にしています。50曲目標に目下20数曲ですが、さて効果の程は？

・對馬　順哉（一九九六年修士修了）

最近、『北大院生協議会史』（花伝社　二〇二四年）を読了し、諸先輩の献身的努力と旺盛かつ先進的奮闘で北大の礎が築かれたという思いを強くしました。

・池田　一成（一九八九年卒）東京都国立市

私事になりますが、昨年の元日に父を亡くしました。その後に詠んだ句を披露します。

元旦の　むくろや口の開いた父

・山形　剛（一九八五年卒）北海道音更町

3月末で41年に渡る高校教員生活を終えました。学部生時代に見聞きした全てが自分の糧になり支えになっていた実感があります。さて4月からはどうしましょうか。

・谷本　美智子（一九五四年卒）札幌市中央区

母、谷本美智子は二〇二六年一月に逝去致しました。生前のご厚情に感謝申し上げます。（長女・代）

・牛島　康明（一九七四年卒）千葉市美浜区

後期高齢者になりましたが千葉で元気に暮しております。恵迪寮１５０周年行事に参加する予定です。

・柴田（桜田）　麻里（一九九四年卒）北海道伊達市

この春、母校教育学部からの教育実習生を受け入れ、指導教師をしました。懐かしい先生方のお名前や、ゼミ、レジュメ、卒論などの言葉も懐かしく聞きました。教育や哲学から真実へ迫る姿勢という、学部の伝統を感じました。教え子兼後輩の学部生と、教育に向き合えた楽しいひとときでした。

訃　報

「謹んで哀悼の意を表します」

・松永　武（一九六七年卒）札幌市白石区　二〇二四年四月逝去

・鈴木　尚（一九五六年卒）京都市左京区　二〇二五年二月逝去

・鈴木　明子（一九五六年卒）京都市左京区　二〇二五年七月逝去

・葛西　明（二〇〇四年修士修了）北海道岩見沢市　二〇二三年五月逝去

・尾谷　正孝（一九六八年修士修了）札幌市豊平区　二〇一四年逝去

・吉田　一男（一九六二年卒）神奈川県藤沢市　二〇二四年二月逝去

・島尾　朝児（一九六四年修士修了）札幌市厚別区　二〇二五年逝去

・忍　博次（一九五四年卒）北海道江別市　二〇二四年一〇月逝去

・宮本　圭輔（一九七六年卒）青森県弘前市　二〇二四年六月逝去

・谷本　美智子（一九五四年卒）札幌市中央区　二〇二六年一月逝去

学部長から

変化の波の中で進むべき道を模索



教育学部長・教育学院長・教育学研究院長
辻　智子

本年度（二〇二六年度）から二年間、引き続き教育学部長（教育学院長・教育学研究院長）をつとめることとなりました。これまでのご協力に感謝申し上げますとともに、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

昨年度（二〇二五年度）は、教育学部は卒業生が六十一名、大学院修士課程は修了者が三十七名（六月修了一名を含む）でした。博士号の学位授与は十二名（九月授与二名、十二月授与一名を含む）に博士号を授与しました（うち二名は論文博士）。とりわけ三月末の授与式では、たくさんの晴れやかな顔と対面することができ、安堵と今後への期待の気持ちをもってそれぞれの背中を見送りました。

また二〇二五（令和七）年度末をもって、安達潤先生、大竹政美先生、渡邊誠先生の三人の先生方が定年退職を迎えられました。

安達先生は、二〇一五（平成二七）年四月に本学部（研究院）に教授として着任され、特殊教育・臨床心理学研究室を担当されてこられました。知的障害・発達障害の臨床経験を土台に、地域の支援現場や行政とも共同しながら研究を重ねられるとともに、二〇二〇（令和二）年十月からは本学学生相談総合センターのセンター長もおつとめになってこられました。

大竹政美先生は、本学研究科修士・博士課程を経て一九九一（平成三）年四月に助手として着任、一九九九（平成十一）年七月に助教授（二〇〇七年四月より本研究院・准教授）、二〇二五（令和七）年四月に教授となられました。教育方法学研究室では、外国語としての英語の教育を軸に言語知識の形成に関わる研究を展開され、教職課程の運営も担ってこられました。

渡邊誠先生は、二〇〇六（平成一八）年に本学保健管理センター講師・専任カウンセラーとして着任され、二〇一〇（平成二二）年より本学部（研究院）の准教授となられました。カウンセラーとして臨床の現場を何よりも大事にされ、臨床心理学研究室では、学生・院生とともに研究を重ねられ、臨床心理士・公認心理師の育成にも尽力されてこられました。

安達先生、大竹先生、渡邊先生、のお三方は北海道大学教育学部の卒業生でもあります。先生方の若き学生時代のエピソードを、ご本人ないし周囲の方々を通じて、時折、耳にすることもあり、一九八〇～一九九〇年代の北大と教育学部に思いをはせる機会をいただきました。本当に長い間、お世話になりました。



▲「こども本の森　札幌・北大」のオープンに先立って、おすすめ本を、子ども発達臨床研究センターの川田センター長（右）と選ぶ

新たな年度となり、二〇二六（令和八）年四月、本学部（研究院）は三名の先生をお迎えしています。亘理陽一先生（教育方法学）、濤岡優先生（家族発達臨床論）、牧野圭太郎先生（健康行動疫学）です。新しい風を力に変えて、教職員一同、皆で前に進んでまいりたいと思います。（それぞれの先生については、ご本人による本誌への寄稿文をお読みください。）

今、大学はさらに激しい変化の波の中にあって自らの進むべき道を模索しているところです。そのような時だからこそ、学生・院生たちとともに、じっくり腰を据えてともに勉学と研究に励んでまいりたいと思っております。

同送生の皆様より頂戴しました寄付（フロンティア基金・学部支援・教育学部）について、この場をかりて御礼申し上げます。どうもありがとうございました。学生・院生たちの学びを支えるために有意義な使い方を今後考えてまいります。なお学部及び大学へのご寄付は以後も継続して承っております。

北海道大学は、札幌農学校開校から一五〇年の節目を迎え、これまでの歩みを真摯にふりかえるとともに未来について考える地点に立っています。今年度、ホームカミングデーはありませんが、もしよろしければ札幌キャンパスに足をお運びいただき、先住民族に対する敬意表明の銘板（正門脇）や、小中学生を主に対象として札幌市と北海道大学が共同で運営する新しいタイプの図書館「こども本の森　札幌・北大」（中央ローン南側）など、近年のとりくみにも触れていただければ幸いです。

退職された先生

生え抜きではないことを是と感じる大学教員からのメッセージ



安達　潤

私が定年退職までおりました研究室は、大学院教育学研究院臨床心理学講座特殊教育・臨床心理学ゼミです。そして私自身の大学教員としての履歴は四十一歳の時に北海道教育大学旭川校で始まり、五十五歳の時に北海道大学に赴任しています。特殊教育・臨床心理学ゼミの院生として北海道大学を単位取得退学したのは三十一歳（おそい！）なので、出身ゼミの大学教員として定年を迎えたことになります。三十一歳―四十一歳という時間経過からおわかりのように私は生え抜きの大学教員ではなく、北大を出た直後から岡山県の重症心身障害児施設旭川児童院の療育課職員として十年間を過ごしました。大学在学中は、自身の研究の方向性も見えなかったのですが、施設職員として障害の

ある人や子どもたちと関わる中で「彼らがどのように世界を体験しているのか」を学生・院生時代の経験や学びを駆使して考えることはかけがえのない経験となりました。そして縁あって、北海道教育大学旭川校に赴任し、実践支援と研究を接続するという意気込みで教育と研究、そして地域支援に注力する十三年間を旭川で過ごしました。この時期、私はかなりアクティブな大学教員で、上川地域でいまも活用されている相談支援ファイル（すくらむ）を行政と連携して開発したり、支援者のスキルアップを図る研修会を開催したり、高機能自閉症児者の親の会を運営したりしていました。そういった中で学生の教育は実践的なものとなり、また研究も支援実践に焦点を当てたものとなり「有効な支援実践を研究として明らかにしていく」という方向に進んでいきました。そして、北大に赴任してからも「実践支援と研究の接続」という方向性は変わらず続きました。ただ、北大に移ってからは、研究的な色合いが多少強まったように思います。学生たちも研究視点を持つ人が増えたことがありますし、研究環境にも恵まれていました。でも、私のゼミで徹底したことは「どんな研究でもいいけれど、支援実践とのつながりは明確に語れなければならない」ということです。私が学生・院生時代を過ごした特殊教育・臨床心理学ゼミは「何をやってもよい」という自由な空気がありました。そのことで昔の私は迷いを生じましたが、北大教員としては「その空気があったからこそ、いまの自分がある」と思える貴重なものでした。だから自身のゼミ運営でその空気を大切にしつつ、研究と支援実践とのつながりを求める教育を心がけました。施設職員を十年経験し、地域支援に十三年携わる中で、私は「確かな研究力と支援実践力を兼ね備えた人材の必要性」を何よりも感じていたからです。学生や院生は、そういった私の気持ちに応えてくれて、多くの者は優れた卒論・修論・博論を執筆し、支援現場へと巣立っていきました。きっと、その中の何名かは、私のように、また、研究職に戻ってくるでしょう。そのことも私の密やかなこの先の楽しみではあります。

そして、定年退職後、私は、児童発達支援センターや認定こども園、発達障害専門の医療機関で発達支援アドバイザーなどをしています。次の大学に赴任するという選択もあったのかもしれませんが、支援の現場に出たかったのです。久方ぶりに子どもの療育に携われるのは大きな喜びですし、これまでの支援実践・教育・研究・地域連携に係る自身の経験を発達支援実践につなげられることはありがたく思います。履歴に紆余曲折のある大学教員として北大を定年退職しましたが、いまの私を作り上げてくれたすべてに感謝して、この稿を閉じたいと思います。

着任された先生



亘理　陽一

亘理陽一と申します。二〇二六年四月に教育方法学研究室の准教授として着任しました。これまでに、静岡理工科大学・静岡大学・中京大学で英語を教えたり英語教員養成課程に携わったりしてきましたが、生まれは札幌市、育ちは北大教育学部です。同大学院教育学研究科で博士（教育学）を取得して以来十八年ぶりの古巣で、教育・研究に携わる機会をいただくことになりました。何卒よろしくお願いします。

私の主な研究テーマは、具体的な授業実践を通じて、外国語教育における言語的知識の形成とコミュニケーション活動の有機的連関構造を明らかにすること、およびそのための授業研究の方法論を実証科学的に再定位することですが、教育方法学研究室としては外国語科に限らず、先人の蓄積に学びつつ教科の固有性・一般性を捉えようとしながら、教育の目的・内容・方法の相互連関を探究します。北海道内の先生方との授業づくりにも積極的に取り組んでいきたいと考えています。



牧野　圭太郎

この度、二〇二六年四月に教育学研究院・健康体育学分野の講師として着任いたしました、牧野圭太郎と申します。私は北海道で生まれ育ち、札幌医科大学・保健医療学研究科で博士号を取得いたしました。その後、愛知県にある国立長寿医療研究センターにおいて、地域に住む高齢者の方々を対象としたコホート研究に従事し、二〇二四年からは北海道大学・環境健康科学研究教育センターにおいて、地域の子どもを対象とした疫学研究に携わって参りました。



濤岡　優

家族発達臨床論研究室の講師として着任いたしました、濤岡優と申します。私は、宮城県大崎市（旧古川市）出身で、北海道大学教育学部および大学院で学びました。博士課程在学中に静岡大学、岩手県立大学で教員を務め、昨年度に博士課程を修了し、この度北海道に戻ってくることができました。

私の研究テーマは、親子・家族の世代間の関わりと生涯発達です。特に、「人を育てる」という経験がその人自身の生涯にわたる発達をどのように支え、自分という存在の理解へと結びついていくのかに関心があります。ここ数年は、北欧フィンランドをフィールドに家族のケア関係に関する調査にも取り組んでいます。

育てていただいた先生方とともに母校の教育・研究活動に携われることを、大変嬉しく思っています。北海道大学教育学部が在学生、卒業生の皆さまにとって、誇れる場所であり続けられるように微力ながら務めて参ります。どうぞよろしくお願いいたします。

今後は、教育学部・教育学院・教育学研究院での教育・研究活動を通して、地域の人々の健康と暮らしを生涯にわたって支えるための知見創出に努めるとともに、健康支援を通じて幅広い視点から社会に貢献できる人材の育成に尽力して参ります。まだ不慣れな点も多くございますが、どうぞご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

うちのゼミはこんなゼミ
「障害者臨床心理学ゼミ（松田康子特任教授）」



▲ある日のゼミ。iPadでアプリ活用、学生がオンラインで参加するときも。左端が松田康子先生

Q1　どのような研究・教育をしているゼミでしょうか。

障害者のことを考えるゼミです。個人の中にある機能障害を研究するというのではなく、環境側にある障壁への意識とともに、その人の生活の営み、経験、生きていく姿を捉えることを志しています。生きづらさを抱えつつも、生きていることの意味、そこへの敬意を大事にしたいと思っています。

ゼミで読む文献も、当事者からの発信を中心にし、当事者とケアの担い手が共同で編んでいる報告などを選んでいます。ラグーナ出版「中井久夫と考える患者シリーズ」の四冊はすでに一巡し、二巡目の途中です。医療者との対話、当事者の手記などを通じて、地域で暮らし生きている姿を、危機を凌ぎ生きていく姿への想像を広げる力を育みたいと思っています。

Q2　ゼミの特徴を教えてください

一九九八年に教育臨床心理学ゼミの助手になり、二〇一五年に今のゼミを開きました。個人的な関心から研究を立ち上げることを何より重視しています。普段のゼミでは、音声認識アプリによるリアルタイム文字起こし、議事録作成やオンライン活用といった授業保障のためのコンテンツ作りにも心を砕いています。また、現場に行くこと、障害者との出会いを大切にしてきました。

二〇一六年九月から名寄市に行って、精神障害の人が利用している就労支援事業所をはじめ、名寄市社会福祉協議会の計らいで地域に根ざす福祉施設の訪問実習を行いました。二〇一八年二月、二〇一九年三月にも訪れ、訪問記をまとめています。

「訪問を受け入れてくださった方々へのお礼は、自分たちが見て関わって感じたことを、一つの研究にまとめ上げるべく、無理に一つの視点に絞ることなく、複数の視点から書き記し、映し返していくことであり、願わくば、それを契機に対話が生まれることではないかと私は考えています。」（二〇一九年十月発行の「訪問記」より）

コロナ禍が広がり、二〇二〇年以降は訪問できなかったのが残念です。

教育学部の伝統行事だった日高管内安平町の障がい者支援施設富門華への見学はコロナ禍で中止になっています。ですが、うちのゼミでは私（松田先生）が授業を担当していたこともあり、コロナ明けの二〇二四年からゼミ生に声をかけて富門華を訪ねています。今年八月で三年目になりました。

Q3　ゼミに来る学生はどんな人ですか。

障害を抱える人が身近にいる方もいますし、看板名から、障害者、不登校、肢体不自由を研究テーマにする学生もいます。テーマはなんでもいいよと言っていますが、質的研究でアプローチしてほしいと言っています。実証科学ではなく、対象となるその人の経験を丁寧にたどり、そこから本質を解いていく面白さを共有していきたいと思っています。自分自身を糸口にしたオートエスノグラフィで卒論を書いた人もいます。

今のゼミ生は学部四人、院生は修士一人、博士一人です。卒業後はケアの担い手を目指す人が多く、医療、福祉、司法、教育、産業領域など、多領域に渡り就職されています。

学生・院生さんから

小笠原怜さん（修士二年）　障害者臨床心理学ゼミの好きなところは、一人ひとりがのびのびとしていて、あたたかい雰囲気があるところです。ゼミでは、一人ひとりの素朴な疑問に向き合い、一つひとつの言葉の意味を丁寧に確かめ合いながら、それぞれが考えをあたためることができていると感じます。私自身、松田先生はじめゼミの皆さんの言葉から日々気づきをいただくことばかりです。そのような時間があるのは、松田先生がいつも学生一人ひとりに親身に寄り添い、ご指導してくださっているおかげです。個々の事情に合わせていつでもオンライン参加ができるよう環境を整えてくださっていることをはじめ、いつも細やかな気配りを欠かすことのない松田先生に感謝するとともに、心から尊敬しています。今年度で松田先生がご退職されるとのことで、残りの貴重な時間を大切にしながら、みんなで卒論・修論を書き上げて三月を迎えたいと思います。

萱野祥弥さん（学部四年）　このゼミを一言で表すなら「難しいから優しいゼミ」になるかなと思います。

ゼミで扱う文献の内容は自身の感覚や常識では捉えきれないものも多く、ゼミとしての「障碍とは何か」という問いにも答えは簡単には出せません。だからこそ文献の記述と各々の解釈に向き合い議論し、最後に一つの答えを出すのではなく、それぞれの落とし所や新たな問いを持ち帰るという「難しさ」があります。

また、このゼミの最大の特徴はオンライン参加や議事録への意見投稿でもゼミに参加できる点だと思います。どんな学生でも参加の機会が保障される設計は、松田先生の哲学の強い現れだと感じています。

そして、こうした環境でゼミに参加し続け、唯一の答えに回収できない問題と向き合い続ける場だからこそ、先生もメンバーも互いに敬意と誠実さ、人としての関心を持って接しています。これがこのゼミが「優しい」と言われる所以だと思います。そのような場で問いと向き合い続ける姿勢を得られたことは、真に「豊かな学び」だと感じています。

キャンパスアラカルト

学位記授与式で会長が祝辞

二〇二五年度の学位記授与式（卒業式）は二〇二六年三月二五日、人文・社会科学総合教育研究棟で行われ、学士六十一人、修士三十六人、博士十一人が辻智子教育学部長・教育学院長から学位記を授与されました。

辻学部長ははなむけの言葉で、戦前、満蒙開拓と呼ばれた中国東北地方への農業移民に村民を送り出すか迷い、現地を視察した長野県の村長の日記を紹介。「大局をつかむことと、眼前の現象との間に大きな落差があり、日記の書き手もそこで苦渋の選択を迫られました」と指摘し、「目の前の出来事と大局からとらえた確信の間で揺さぶられ続けながら私たちは歩んでいくしかありません。その歩みの中で皆さんにとって北海道大学での経験が一つの羅針盤になれたらと願わずにはいられません」と結びました。

宮﨑隆志同窓会長も祝辞を贈り、「力による平和」論が世界を席巻しているとして、その背景に社会システムの行き詰まりがあると指摘したうえで、「人間が自らを信じられなくなりつつある現代社会において、人間らしく生きたいという切実で根源的な必要と要求に応答する専門性を皆さんは追求してこられました。その専門性は、人間の根源に立脚する限り、部分に留まることなく、全体の方向性を見通す倫理的な知を含むはずです」と話し、「他者とともに問いを深め続けられる専門性に磨きをかけて」と期待を述べました。

式には同窓会からお祝いの卓上花を贈りました。

学年幹事に中山さんと榎本さん

二〇二五年度の卒業・修了の同窓会学年幹事が決まりました。昨年から学部、大学院一人ずつとなり、今期は学部が中山実優さん＝**写真左**＝、大学院が榎本由里子さん（修士修了）＝**同右**＝です。

教育貢献賞に千葉さん、高井さん

二〇二五年度の教育貢献賞は千葉蛍太さん、高井久遠さんに決まり、学位記授与式（卒業式）の会場で、宮﨑隆志会長から賞状と副賞が贈られました。

二人とも学部二年生（当時）での受賞となりました。

千葉さんは「研究（実践）での優れた実績」による受賞。二〇二五年十二月にオンラインで行われた「ユースファクトチェック選手権」世界大会に札幌大谷大学の友人と二人で参加して優勝しました。

大会はニュース画像の真偽を判断したり、AIで作成された動画を選ぶなどの問題を解くものです。千葉さんのチームは十一月の国内大会も含め全勝という圧倒的な強さで、世界大会では同じく全勝だった台湾チームを解答スピードで上回り世界一の栄冠を勝ち取りました。





▲宮﨑会長から賞状を授与される高井さん（右）

事前にたくさんの画像を見るなどして判断力を鍛えたという千葉さん。「基本は人間の力。この能力を生かせるようにしたいです」と話していました。



▲宮﨑会長から賞状を授与される千葉さん（左）

高井さんはエッセー集「そこに縁があるから―Because It's There」を自費出版し、「地域社会の人びとへの貢献」で受賞しました。タイトルは出身地オホーツク管内遠軽町のまちづくりの基本理念「縁があるまち」にちなみ、地元での友人、恩師との出会い、大学で学ぶ教育学についての思い、高校時代に体験したブラジルにある町の姉妹都市訪問などをつづりました。また高井さんは子どものころから武道の杖道を続けており、二〇二四年の全日本杖道大会三段の部で最高賞の優秀賞に輝くほどの腕前。エッセー集ではその杖道の仲間たちとの交流にも触れています。「二十歳になる前に文章を書いて本を出したいと思っていました。十九歳としての成果プロジェクトです」と話していました。

北大祭に一二万人

第六十八回北大祭が六月五日から七日まで三日間開かれ、三日間で十二万千人が来場しました（全学実行委員会発表）。総合教育棟（旧教養部棟）で行われた公開講義では、教育学研究院の安達潤名誉教授が「自閉スペクトラム症の人たちの世界」と題して講義を行いました。メーンストリートには恒例の模擬店が立ち並び＝**写真**＝、「世界の味」を楽しむ人でにぎわいました。



会務報告（2025年度）

2025年8月8日
常任幹事会
①業務の進捗状況について、②2025年度定期総会について、③会則改定による新会員の把握について、④その他

2025年9月1日
同窓会だより第43号発行
会費の納入および近況報告用のはがきを同封

2025年9月27日
同窓会総会

2026年1月27日
校友会エルム理事会

2026年2月25日
常任幹事会
①2025年度会務報告、会計報告、②学位記授与式の隣席について、③教育貢献賞の授与について、④2026年度同窓会幹事会幹事会の実施について

2026年3月25日
2025年（令和7年）度教育学部・教育学院学位記授与式
宮﨑会長、佐々木幹事長、後藤常任幹事、佐藤常任幹事が臨席
「同窓会だより第43号」と同窓会入会について案内文書の配布
宮﨑会長の祝辞
教育貢献賞の授与
千葉蛍太さん、高井久遠さん
学年幹事の委嘱
中山実優さん（学部卒業）、榎本由里子さん（修士修了）に委嘱

2026年6月12日
教育学部同窓会幹事会

2026年7月7日～7月10日
書面審議（メール審議を含む）により、2026～2027年度の役員決定
会長：宮﨑隆志
副会長：近藤健一郎
幹事長：杉山昌夫
常任幹事：後藤隆之、佐藤淳治、佐藤理香、澤田美和子、和田昇
監事：石川信之

厚く御礼申し上げます

二〇二五年度に同窓会支援、教育貢献賞基金等、年会費を超えて送金された方々です。
心よりお礼申し上げます。
諸物価高騰の折り、同窓会の財政は厳しい状況です。引き続いてのご支援をどうぞよろしくお願いいたします。
なお敬称は省略し、年次は把握している学籍の最終年次を記載しましたが、事務局が不慣れなため、年次の記載のない方がいらっしゃいます。大変申し訳ありません。

太田　成司（一九八〇年卒）
石田　奨吾
辻　英之（一九九三年卒）
井上　蓉子（一九六二年卒）
森谷　絜（教職員）
近藤健一郎（一九九〇年卒）
井上　薫（一九八五年卒）
伏木田政義（一九六九年卒）
矢崎　秀人
（二〇一四年修士修了）
須田　力（一九六六年卒）
福田　三行（一九六九年卒）
三浦　英典（一九七四年卒）
坂本ひろみ（一九九一年卒）
鈴木里律子（一九七八年卒）
市川　剛章（二〇一一年卒）
田村　卓哉（一九八〇年卒）
木村　智子（一九九九年卒）
齋藤真姫子（一九八六年卒）
笹原　晶博（一九七九年卒）
小島　忍（一九五六年卒）
橋爪　幸正（一九六一年卒）
濱田　一康（一九七七年卒）
中野　茂
（一九八五年博士中退）
犬童いづみ（一九八〇年卒）
大居　健二（一九五七年卒）
佐藤　順吉（一九七五年卒）
安達　輝政（一九七九年卒）
国吉　昌晴（一九六六年卒）
石川江津子（一九八一年卒）
阿部　剛康（一九九一年卒）
渡辺　有賢（一九七八年卒）
奥寺　雅道（一九七七年卒）
小松　均（一九八四年卒）
小野塚恒男（一九七八年卒）
多米　豊（一九五四年卒）
逸見　勝亮
（一九六六年卒業／一九六九年修士修了）
白取　道博
高橋　英一（二〇〇一年卒）
小野　義拓（一九五九年卒）
橘内　哲也（一九五五年卒）
竹内　眞（一九六九年卒）
三浦　春恵（一九六三年卒）
佐藤　淳治（一九八四年卒）
奥見　花（一九九八年卒）
小松　典子（一九六六年卒）
佐藤　修二（一九七九年卒）
松浦　泰樹（一九九七年卒）
秋元　義禮（一九七三年卒）
富士本百合子
（二〇一七年卒）
柳谷　憲治（一九九七年卒）
徳勢　正昭（一九六五年卒）
谷　憲一（一九九〇年卒）
長峯　憲二（一九六〇年卒）
月舘　修（一九七〇年卒）
井上　弘子（二〇〇〇年卒）
瀬川　孝広（一九九二年卒）
町井　輝久（一九六八年卒）
高山　幸一（一九七四年卒）
後藤　弘（一九六一年卒）
高橋　正和（一九八一年卒）
後藤　隆之（一九七五年卒）
廣瀬　雅哉（一九七六年卒）
松井　建人（一九九六年卒）
成澤　優（一九六九年卒）
和田　昇（一九八三年卒）
宮﨑　隆志（一九八二年卒）
佐藤　文（一九八一年卒）
高橋　道裕（一九八四年卒）
向井　一弘（一九九九年卒）
廣山　葉月（二〇一八年卒）
笹瀬　雅史（一九八六年卒）
松家　一樹
鈴木　隆
遠藤知恵子
伊藤　勇（一九六五年卒）
原　直美（一九九三年卒）
坂本　仁彦（一九七〇年卒）
寺本　一平（二〇一八年卒）
中澤　壮王（二〇一九年卒）
匿名（三名）

2025 年度（2025.4.1～2026.3.31）決算書

一般会計

収入	予算額（円）	決算額（円）	差（円）	説明
繰越金	1,281,172	1,281,172	0	
会費	500,000	406,000	－94,000	203 名
過年度分会費	20,000	52,000	32,000	4 名
同窓会支援寄付金	150,000	198,000	48,000	
会費外収入	50,000	58,000	8,000	「全学校友会」支援金、広告料ほか
特別会計分担金	15,000	15,000	0	特別会計負担分
雑収入	828	914	86	預金利息等
合計①	2,017,000	2,011,086	－5,914	

支出	予算額（円）	決算額（円）	差（円）	説明
会報等発行経費	650,000	596,934	53,066	会報 1,800 部、郵送料等
払込手数料／通知料	45,000	41,236	3,764	会費納入時
料金後納支払	12,000	12,876	－876	近況連絡用ハガキ
通信連絡費	35,000	22,765	12,235	郵送料等
学位記授与式協力費	15,000	15,000	0	債権確定（3 月末執行予定）
交流研修費	20,000	0	20,000	
会費	3,000	3,000	0	関西エルム会
事務局活動費	40,000	25,000	15,000	事務局費用弁償（他に支出予定あり）
消耗品費	15,000	2,049	12,951	
印刷費	10,000	2,035	7,965	コピー料金
予備費	15,000	27,600	－12,600	150 年記念式典協賛金
合計②	860,000	748,495	111,505	

①－②		1,262,591		

次年度繰越金

特別会計〈教育貢献賞〉

収入	予算額（円）	決算額（円）	差（円）	説明
繰越金	481,698	481,698	0	
基金収入	120,000	122,000	2,000	61 口
合計③	601,698	603,698	2,000	

支出	予算額（円）	決算額（円）	差（円）	説明
教育貢献賞賞状	35,000	26,400	8,600	
教育貢献賞副賞	40,000	40,000	0	
手数料	1,000	220	780	
負担金	15,000	15,000	0	
合計④	91,000	81,620	9,380	

③－④		522,078		

次年度繰越金

年会費納入のお願い

会員の皆さまには日頃から同窓会活動に深いご理解とご協力を賜り、心よりお礼申しあげます。

さて北海道大学教育学部同窓会の運営は、その財政基盤のほとんどを会員の皆さまの年会費に依存しております。円滑な同窓会活動を推進するため、年会費の納入にご協力くださいますようお願いいたします。同封の払込取扱票で郵便局の窓口またはＡＴＭで納入ください。

なお次の銀行口座へ振り込みが可能です。この場合、振り込みに関する手数料等は振込者負担になりますので、ご了承ください。

・北海道銀行　南一条支店
普通預金　一〇七三九九七
北大教育学部同窓会

・ゆうちょ銀行　二七九（ニナナキユウ）店
当座　〇〇〇四三二九
北大教育学部同窓会

お願いとご注意

ゆうちょ銀行（郵便局）の会費等納入で「同窓会報」同封の払込用紙使用の場合、従来は払込者の料金負担はありませんでした。ところが、二〇二二年一月一九日から一部有料となりました。

ＡＴＭから通帳またはカードを使用の場合　⬇　無料
ＡＴＭから現金払い　⬇　⬇　有料
窓口で現金払い　⬇　有料



〈編集後記〉

▼今年も「同窓会だより」をお手元にお届けすることができました。今号は恵庭支部、学校教育支部の発足のニュースが紙面を飾りました。また、健康体育系の同窓生のつどいもありました。

支部活動は宮崎隆志会長が力を入れる同窓会活性化策の一つです。地域や職域などで同窓生が語り合う場を作ることで、同窓会を「互いの人生物語を聴きあう場」（「同窓会だより」第四二号）として、そして「未来を語る場」にしていこうという趣旨だと思います。両支部の今後の活動に期待するとともに、ゼミの同窓会も含め各地でこうした動きが広がることを期待したいものです。

こうした集まりや支部発足の動きは事務局にお知らせください。それぞれのニュースが刺激となって、その動きがさらに広がっていく―「同窓会だより」の役割はそこにあるように思えるのです。

▼前幹事長の佐々木孝一さんの新著が出ましたので、ご紹介します。「江別の絵はがきものがたり」（共同文化社）＝写真＝で、「大正の半ばから昭和四〇年代まで半世紀に渡る江別の歴史を絵はがきで展開」しています。札幌市内の大型書店、アマゾンなどで購入できます。一六五〇円。



今年は同窓会総会がありません
同封のはがきは近況を記入してご返送ください

同窓会会員のみなさま。

教育学部同窓会の総会は北海道大学ホームカミングデー（例年九月最終土曜日）に合わせて開催しておりますが、今年はホームカミングデーが開催されず、創基一五〇周年記念式典及び記念イベントが開催されることになっています。このため同窓会総会も残念ながら開催されません。

総会がありませんので、今年の「同窓会だより」に同封したはがきには総会の出欠を記入する欄はありません。

ただ、総会出欠連絡のはがきは、会員のみなさまをつなぐ大切な役割も担っています。今回もぜひ近況を書き入れていただき、ご返送ください。

グーグルフォームからも近況を書き込むことができます（QRコードもご用意しました）。よろしくお願いします。

https://forms.gle/NyUZ38sMLXCf68xs8